

前号を読んで

研究科統合の利点は

堤 明人

人間総合科学研究科助教授

前号では国立大学法人化にともなう変化を教育の面から見た記事が多く掲載されていた。日頃目先の仕事の処理に忙殺されている人間にとっては「筑波大学」全体に目を向けるよい機会になったのではないかと思う。普段の大学生活に目を向けると、われわれのところが特殊なのかもしれないが、人間総合科学研究科の一員になったことをなかなか自覚することができない。人間総合科学研究科は教育学、心理学、心身障害学、体育科学、芸術学、医学の6研究科を統合・発展させて発足したのであるが、現実問題としてかつての他研究科に属する教員や学生と接触する機会はきわめて少ない。もっと専門を同じくしない方の知識やアイデアを吸収する機会があればと思う。ただし、専門分野横断的な聴衆を対象にした講義・講演を企画実行することは自己の学問を考え直すいい機会となるが一方で新たな負担ともなるであろう。さらに、教員や大

学院生は自己の専門分野における教育や研究で多忙であり、専門分野に直結しない講義・講演に出席することをためらうことも多いであろう。講師が時間をかけて準備をしても出席者はごくわずかといったこともおこりうる。とって聴衆を動員することはできない。

しかし、学群、大学院での教育にある程度他分野の学問や研究の実際を組み込むことは、自分にあった研究分野を選択させ、また視野の広い研究者を養成していくためには不可欠だと思われる。高校生時代に選んだ分野が必ずしも本人に最も適しているとはかぎらない。様々な分野の教育者研究者を擁する利点を生かして教員にも学生にも大きな負担にならない方法で他分野に接する機会を作ることができればと思う。他の分野に興味をもち、その分野で研究を行う者がでてくる可能性も大きくなる。また、他分野の話から思わぬアイデアが得られることもありえる。

私は一度大学を中退して進路を変更したことがあり、個人的には学士課程の間にも他の学群の学問に接したり、場合によっては学類・学群の枠を超えた進路の変更があってもいいと思うが、これは容易なことではないのであろう。各学生がしっかりと将来を見据えた選択を行えるよう学生自らはもちろん、教員も考えていく必要があると思う。(つつみ あきと/臨床免疫学)